

生徒指導部会

I. 研究の概要

1. 研究課題

「自らの生き方を築き上げる力を育てるための効果的な指導の在り方を考える」

2. 研究内容

学校教育に関わる諸問題が多様化している今日だが、新しい教育観・指導観・生徒観・学力観にたち、今までの研究の成果や体制を生かしながら研究を推進していきたいと考えた。今年度に関しては、「新型コロナウイルス感染症対策」の影響のため、例年通りの活動が行えないと判断した。そこで、喫緊の課題である下記のテーマを設定し、個人や学校でレポートを作成し、研究を推進していきたいと考えた。

【研究テーマ】

- (1) 新型コロナウイルス感染防止における、各学校の指導体制について
- (2) 新型コロナウイルスによる、生徒や家庭への影響について
- (3) 各学校における生徒指導の実態とその対応について、および小中学校との連携、学校や家庭や地域、他機関との連携を深める手立て

3. 研究方法

(1) 交流計画

実践研究（個人、学校、市町村等）と研修活動（理論研、実技研、講演）および還流活動（情報、研究協議会、推進委員による実践交流等）の3本柱で研究・交流を進める。

【研究方法1】実践研究の進め方

- ・ 各市町村での研究実践の交流
- ・ 小中学校の交流会
- ・ 事例研究

【研究方法2】研修活動の進め方

- ・ 理論研修会
- ・ 実技研修会
- ・ 視察訪問研修会

【研究方法3】還流活動の進め方

- ・ 部会情報の発行
- ・ 推進委員による各市町村実態交流
- ・ 市町村第二次研究協議会 ➡ 中止

(2) レポート作成

上記の3つの【研究テーマ】に分けて、各校の実践をレポートにまとめていただいた。その際、大枠として以下のキーワードを参考にさせていただいた。

<研究キーワード>

【研究テーマ(1)】

指導体制、基本的な生活習慣の定着、情報収集、関係機関との連携 等

【研究テーマ(2)】

不登校、個別支援、教育相談、カウンセリング、出席停止

【研究テーマ(3)】

指導体制、基本的な生活習慣の定着、学級崩壊、児童虐待、情報収集、関係機関との連携、インターネット、掲示板、スマートフォン、SNS LINE 等

(3) 研究協議会の内容・方法

研究協議会については、1日日程で実施する。午前は講演会を実施し、午後は研究の柱ごとに分科会に分かれての討議を中心に進めていく。 ➡ 中止

Ⅱ. 実践研究の経過と成果

1. 実践研究の経過

(1) 部会役員研修会による研究経過

- | | |
|----------|--|
| 5月11日(月) | 第1回役員研修会
令和2年度の研究計画と研究内容の確認 |
| 6月30日(火) | 第2回役員研修会
今年度の生徒指導部会の活動について |
| 8月6日(木) | レポート作成案内 |
| 9月11日(金) | レポート提出締切 |
| 11月2日(月) | 第3回役員研修会
今年度の生徒指導部会の活動について②
第1回推進委員研修会
レポート集の交流、各地区の生徒指導案件についての交流 |
| 12月 日() | 第4回役員研修会
来年度の運営計画・役員選考 |

2. レポート交流

(1) 実施方法

- ①レポート作成の案内 (8月6日)
- ②レポート締切 (9月11日)
- ③レポート配付 (11月2日)

(2) レポートのテーマ

- ①新型コロナウイルス感染防止における、各学校の指導体制について
- ②新型コロナウイルスによる、児童生徒や家庭への影響について
- ③各学校における生徒指導の実態とその対応について

(3) レポート考察

①新型コロナウイルス感染防止における、各学校の指導体制について

<職員の連携>

学校種・学校規模に関わらず、「職員の連携」を重要視している。「新型コロナウイルス感染防止」という答えのない課題に対して、職員全体で対応しようとする姿が窺える。「日々の生活をどう安全に過ごすのか」「どのような形なら各種行事を開催できるのか」… 職員会議等で時間をかけて検討してきている。そして、決定したことは学校全体で徹底できるよう工夫を凝らしながら指導体制を確立させている。

これまでも生徒指導上で大切にされてきた「職員の連携」は、コロナウイルス感染症の対応でより強固なものになっているように感じた。

<児童・生徒への啓発>

今や公共施設や商店など至る所で掲示されているコロナウイルス感染症の対応の啓発ポスター。学校現場も同様に、児童・生徒が常に「新しい生活様式」を意識しながら過ごせるようポスター掲示等で周知している。中には、音楽で手洗いを促したり、学校オリジナルの呼びかけを作成したりして、子どもが覚えやすいための工夫がみられた。

大切なことは、「いつ誰が感染してもおかしくない感染症」であることをきちんと教えること。罹った人への間違った偏見や差別を生じさせないこと。その上で、なぜ「新しい生活様式」が必要なのかを児童生徒の実態に合わせ理解させ、指導す

2020年度
石教研
生徒指導部会

レポート集



ることが必要であると感じた。

<家庭との連絡手段>

メールを使用した家庭との連絡手段は、このコロナ禍でより増えたようだ。突然の休校措置を考えると、メールでの情報発信はもはや必須の連絡手段なのかもしれない。休校中には、動画を配信した学校や Zoom を活用した授業を進めた学校もあった。やってみたことでみえてきた成果や課題があったようだ。環境を整備することはもちろんのこと、実践校から学び、情報を共有していくことが今後求められていると感じた。

<行事>

「中止にすることは簡単。どうしたらこの状況で安全に行えるのか」が今年度の行事のテーマであったように思う。やむをえず中止にした行事もあったようだが、分散開催などの工夫で開催にこぎつけるなど、教職員の努力の様子が窺えた。

今後は、保護者をどのような形で学校現場に戻していくのが、各校頭を悩ませている課題であるように感じた。

<暑さ対策>

この夏、どの学校も頭を悩ませた「暑さ対策」。各校工夫を凝らしながら、乗り越えた様子が窺える。「暑さ指数」や「熱中症」の計測機を使って、客観的な尺度で判断している学校もみられた。また、扇風機や冷風機の設置など環境整備を進めた学校も多かった。今後は、換気をしながらの「寒さ対策」が課題となるだろう。

②新型コロナウイルスによる、児童生徒や家庭への影響について

<見えないストレス 児童・生徒>

「不登校の子が増えた」と感じている学校が多かった。S C の予約数が増えたり保健室に利用率が増加したりなど、数字的にも明らかに心に不安を感じながら生活している子が増えている。不安な子が「いつでも安心して話すことのできる場」を作るなど引き続き、「心のケア」を大切にした指導体制が求められる。

<見えないストレス 保護者・地域住民>

「公園でマスクを外して遊んでいる子がいる。指導してほしい」「子どもたちの自転車の乗り方が悪い。指導してほしい」放課後ルールを守らずストレスを発散している子がいる一方で、地域住民の目は例年以上に厳しいものを感じた。

放課後の生活も含めた子どもたちへの指導が必要であると共に、「学校便り」やホームページなどを通じた保護者や地域住民への丁寧な説明も求められている。

<誹謗中傷>

残念ながらコロナの疑いのある子への誹謗があった事例があった。その後、適切な指導がされたようだが、誹謗中傷を生じさせない日頃の指導が大切であると感じた。マスメディアからの情報で不安になっている子どもは多い。「コロナ」に関する正しい知識を指導者自身が常にアップデートさせて、「正しく恐れる」姿勢を子どもたちに身につけさせていくことが大切であると感じた。

③各学校における生徒指導の実態とその対応について

<SNSトラブル>

コロナ以前から問題になっていた SNS トラブル。家で過ごす時間が増えたことで、「見えないトラブル」も増えたようだ。今年度は、未然防止の指導など、学校でできることも限られている中で、トラブルが起こった後に対応に追われている様子が窺える。トラブルが起こった後の指導に困難を極めることから、未然防止の指

導が益々重要になっていると感じた。

3. 第1回推進委員研修会の様子

今年度は、1回のみ開催となったが、例年4回程度各地区の推進委員にお集りいただき、各地区の生徒指導の課題等を交流している。地区の様子、レポート集の交流の後、以下の2点について討議した。



①祭りの巡視について

ここ数年「働き方改革」の視点で、休日の祭りの巡視について見直しが図られている。地区によっては「無くす」という意見も出ているが、「多くの児童・生徒が参加する地域の祭りに、学校が協力しないということにはできない」「これまでの経験値から、巡視による問題行動の抑止力が無くなるのは心配である」など、無くすことはできない意見も多くあった。ただ、市内の学校で分担して負担を軽減したり、回復措置をしっかりと取るなどの工夫や改善は、今後必要であると確認された。

②頭髪「ツブロック」の対応について

校則に則って禁止としている学校が多い。「ツブロック」の社会的認知度が高まっていることで明確な禁止理由を示すことができず、苦慮している点が話し合われた。「すべてのツブロックが華美で奇抜なものとは言えないが、その線引きが難しいため」「高校ではっきりと禁止している学校があり進学につなげるため」という視点から、禁止理由を伝えているという意見が多かった。

Ⅲ. 講演会（実技・理論研修会） →中止

Ⅳ. 部会研究の成果と課題

1. 成果

レポート交流では、各校のコロナ禍の課題や対応についての実践交流を通して、様々な視点から生徒指導に関わる考えや理解を深めることができた。特に他校の実践と比べることで「自分の学校ではこの部分は指導が甘かった」「こんな指導方法もある」という点に気付くことができたのは大きな成果である。

「指導できないこと」でみえてきた点もあった。4月当初、「今までの指導」を十分にできなかった新1年生への影響は、今になっても指導が必要だったり、時間を要していたりする点から、「早期指導の重要性」を感じる事案であった。これまで当たり前に行ってきた指導を一つひとつ見直す機会となった。

2. 課題

複雑化している様々なトラブルに対して、適正かつ効果的な指導ができるように、私たち教職員は広い視野を持って日々研修していかなければならない。

今年度は、「新型コロナウイルス感染症予防」という答えの無い課題にどう向き合っていくかが問われている。

コロナ禍でより一層、SNSトラブルへの対応、不登校児童の対応などの課題が浮き彫りになった。部会としても、継続して検討していかなければならない課題であると捉えている。

このコロナ禍で何より大切な生徒指導事項は、誹謗中傷を生じさせないことである。「正しく恐れる」ことは、このコロナ禍の生徒指導で常に頭に置いておきたい視点である。

まだまだ、この状況が続くような学校現場。各校の実践を交流し、知恵を出し合って乗り越えていきたい。



（文責 佐瀬 智之）